

2021 年度

梅光学院中学校・高等学校
学校評価書

梅光学院中学校・高等学校

1 学校教育目標

*学校目標

Beyond the Borders 「自分を超越る・国境を越える」

*生徒目標

学び・経験・奉仕

- ・「学び」:授業、学校行事、課外授業、課外活動、留学、ボランティアなどあらゆる機会を用いて生徒は学びます。
- ・「経験」:体験したことを言語化して、他者に伝え、他者からフィードバックを得ることによって「経験」へと昇華する。
- ・「奉仕」:学んだ知識、技術、能力を他者のために用いる。

2018年度に掲げた教育目標を継続して定め、これに従って教育を行っていく。

2 現状分析

- ・学び:ICTを活用することによって主体的な学びをスライドや動画で発表することができるようになった。生徒のICT活用術は年々向上しており、目を見張るものがある。特に、マッケンジー杯では、中1～高ⅡまでSDGsについてICTを活用しながら英語で発表をすることが定着してきたことも評価すべきことである。
- ・経験:「Wake-Up全員留学」プログラム開4年目であったが、「新型コロナウイルス感染症」感染拡大の影響で、中学も高校も実施できなかった。また、オーストラリアを始めとして、アメリカ(ディズニーワールド)、オーストラリア(音楽)、韓国等の研修旅行等も昨年度同様、まったく実施できなかった。昨年度唯一実施できたニュージーランド長期留学も今年度はできず、個人でカナダ長期留学に行った中2の1名のみが留学を経験することになった。他の学校に比べ、留学制度が多彩である本校にとって、その特色を出すことができず、大変残念である。ただし、高Ⅱで高大連携の一環として実施している「研究」はそれぞれの研究テーマに即して、大学の先生に師事し、よい発表、論文となってきた。3月に行われた論文発表会では、多種多様な分野の研究が発表され、今後の学びの動機付け、将来の進路の動機付けともなるものであった。
- ・奉仕:「新型コロナウイルス感染症」のために、学外に出るボランティア活動はできなかったが、サマリア・デー、サマリア・カジュアルデー等、今年度も実施され、途上国の子どもの教育支援に資している。また、昨年度から生徒会を中心に、校則を自分たちで考えたり、すべての生徒が入る委員会制度を実施したりと大変積極的だったが、これが今年度も継続され、よりよい学校づくりが進んでいる。生徒が全校生徒たちのために何ができるか考え、実行することはまさに奉仕の精神であった。

3 本年度重点を置いて目指す成果・特色、取り組むべき課題

- ・学び:英語のプレゼンテーションコンテスト、「マッケンジー杯」でSDGsに関連する英語のスピーチを中高生が実施したことは素晴らしかった。そこで提案されたことを日常の授業や行事等で連携し、実際の活動にしていくことが今後の課題である。
- ・経験:「新型コロナウイルス感染症」の影響で留学ができなかった分を補完するためオンライン留学を実施したが、コロナの影響が続くようであれば、オンラインで実施できるものがないか、他にも検討しなければならないと思われる。
- ・奉仕:生徒会が提案した月1回、私服で登校してよい「カジュアルデー」と「サマリアデー」の実施を同日にしたことによってサマリアデー献金が増えたが、何のために「サマリアデー」を実施しているかという説明が不足していたと思われる。この活動をSDGs等につなぐことも課題であると思われる。

4 学校評価総括(取組の成果と課題)

・学び:

①ICT教育-音声ソフト等、新しく出ているソフトを使用しながら、生徒の自主的な学びのために、さらに運用方法について検討が必要である。

②進路指導-中1～高3まで定期的に進路検討会が実施されたのは、よかった点である。これを今後も継続し、早い段階から生徒の志望を聞き取り、それを自主的な学びにつなぐこととする。

・経験:

①Wake-Up全員留学-「新型コロナウイルス感染症」感染拡大により、中高の両方ともに実施できていないので、2022年度は高Ⅲから始めて、何らかの形で実施する必要がある。

②各種留学-「新型コロナウイルス感染症」感染拡大のため、すべて実施できなかったため、来年度は実施できるものからしていく必要があると思う。

③高大連携事業-高Ⅱの研究テーマを各自考え、大学の先生に指導していただくことは学びの動機付けや将来の進路の動機付けになるので、今後も大切なプログラムとして継続していきたいと思う。

・奉仕:

①ボランティア活動-「新型コロナウイルス感染症」感染拡大のために外部におけるボランティア活動は実施できなかった。感染者が少なくなれば、来年度は宗教部を中心として、また授業でも積極的に奉仕活動をさせたい。

②サマリア・デー-月々のサマリアデー献金活動やサマリア・カジュアルデー活動は通常通り実施できたので、来年度もこの活動がより活発になるように実施していく必要がある。

5 次年度への改善策

・学び:

①全員担任制-2020年度から実施した全員担任制が定着してきたことは評価する点であるが、もっと生徒情報を共有する必要があると感じている。

②研修:月曜日と金曜日放課後の研修も定着してきたが、管理職がその内容を考えるだけでなく、他の教員からの提案によって実施することも必要と思われる。

・経験:Wake-Up全員留学が「新型コロナウイルス感染症」感染拡大のため、2年間行われなかったため、来年度は中高すべての学年がその留学の対象学年となる。そのために、1年間の行事や学期の授業の流れの中で、Wake-Up全員留学をどの学年にいつ頃実施するかということを判断することが重要である。また、コロナの関係で国や実施期間の変更も余儀なくされる可能性があるため、世界の感染状況を見ながら、早めに方針を出す必要がある。

・奉仕:「新型コロナウイルス感染症」の感染が収まれば、宗教主任を中心に、地域のボランティア団体と話し合い氏、生徒たちは少しでもボランティア活動出していくことが重要である。また、カンボジアに行くことができれば、大学生と共に、支援地に赴く活動も実施したいと考える。

梅光学院中学校・高等学校 部門評価シート 2021年度（分掌）

*達成度は4段階で評価します

学校評価における部門評価							
分掌名	重点目標	具体的方策	達成基準	最終評価	達成度	達成状況の診断・分析	責任者
教務部	① 授業の実質化（授業時数の確保）	○行事の精選 ○単元別テストによる授業回数の確保 ○オンラインテストの開発と実施	A 目標の80パーセント以上を実行できている。 B 目標に見合う成果を60パーセント以上を実行できている。 C B以下	新型コロナウイルス感染症の流行による影響が昨年度に引き続きあったが、対面授業を重視しつつ、オンライン授業を適宜行うことで、授業をしない期間はなかった。授業回数は確保したが、テストはオンライン対応のものを全教科開発することはできなかった。	B	新型コロナウイルス感染症による影響が大きい中、授業回数や機会は、オンライン授業を適宜実施することで確保できた。一方、オンラインテストは英語など、実施が難しい教科もあり、全面的に可能とはまだなっていない。今後は、評価の観点、対象を再検討し、教育活動における「評価」に関して意識改革を行いながら、オンラインでも実施できるテストを開発していく必要がある。	只木 徹
	② 学校行事や時間割などを適切に計画し、また、教材備品等の環境を整える。	○授業に支障のないように、時間変更や教材の発注を行う。 ○時間割編成時、完成時に必修科目を確認する。	A 目標の80パーセント以上を実行できている。 B 目標に見合う成果を60パーセント以上を実行できている。 C B以下	昨年度に引き続き、学校行事等は新型コロナウイルス感染症の流行でしばしば変更を余儀なくされたが、教務的に問題なく変更を処理できた。時間割作成後必修科目のチェックを行うことができた。教材備品も常に必要なものがある状態に保つことができた。	A	行事の変更が今年度もあったが、教務的な問題が発生せず、適切に処理できた。これはコロナの影響が2年目となり、行事変更等に慣れてきたことも要因と言える。	
	③ 学籍・成績管理に関する事務処理を迅速に行う。	○生徒の異動が起きた際、転入試験の準備、退学関係書類の作成など、迅速に事務処理を行う。 ○教務システムをSiemsとClasasiからBlendに変更するにあたり、その移行をスムーズに行うために、半年を目処に早めに両システムを並行して運用す	A 目標の80パーセント以上を実行できている。 B 目標に見合う成果を60パーセント以上を実行できている。 C B以下	転入試験に適切に対応して処理できた。 退学や転出事務も適切に迅速に行えた。 Blend導入にあたり、Siemsと並行して運用を開始し、問題点を把握しながら進めることができた。	A	新しい教務システムは、出欠席の取り方など、現行のものとはかなり違い、戸惑う先生が多い中、Blendを早めに使い始めることにより、問題点も早めに把握することができ、スムーズな移行が実現しそうである。	

梅光学院中学校・高等学校 部門評価シート 2021年度（分掌）

*達成度は4段階で評価します

学校評価における部門評価							
分掌名	重点目標	具体的方策	達成基準	最終評価	達成度	達成状況の診断・分析	責任者
生徒支援部	① 自主的に学校生活を送るよう支援する	○生徒会活動の活発化 ○委員会活動の活発化	A 目標の80パーセント以上を実行できている。 B 目標に見合う成果を60パーセント以上を実行できている。 C B以下	昨年度からの活発な生徒会・委員会活動を継続して実施することができた。高川から高IIへの引継ぎについては、委員会によるが、今の世代の委員長を中心に活発に活動を続けている。	A	今年度の生徒会及び委員会活動は充実しており、自主性が育まれた。高川の活動理念を引継ぎつつ、新たな世代の特色を打ち出そうとしている。	只木徹
	② 発達障害等に関して全教職員で情報を素早く共有し健やかな発達を促す	○毎日朝と放課後に全教職員で情報共有のための会合を行う ○毎週職員会議を行い関係の情報を共有する ○毎週非常勤講師を含めて研修会を開催し、関係の情報を共有する	A 目標の80パーセント以上を実行できている。 B 目標に見合う成果を60パーセント以上を実行できている。 C B以下	毎日実施される教員の朝会、帰りの会において、その日のクラス・生徒の様子を教職員で共有することができた。毎週月曜日放課後に職員会議、金曜日放課後には研修会を行っており、そこでさらに詳しい生徒の情報を共有したり、指導方針を議論したりできた。発達障害などをはじめとする課題に関して、学校として一致した方針で指導することができた。	A	課題の共有を徹底的に行うことができた。スクールカウンセラーや家庭、外部機関なども交えて指導方針を決めてきた。教職員で指導方針の統一を行い継続して支援を続けている。	
	③ 問題行動に関して全校で情報を素早く共有して生徒の健やかな発達を促す	○毎日朝と放課後に全教職員で情報共有のための会合を行う ○毎週職員会議を行い関係の情報を共有する ○毎週非常勤講師を含めて研修会を開催し、関係の情報を共有する	A 目標の80パーセント以上を実行できている。 B 目標に見合う成果を60パーセント以上を実行できている。 C B以下	毎日実施される教員の朝会、帰りの会において、その日のクラス・生徒の様子を教職員で共有することができた。毎週月曜日放課後に職員会議、金曜日放課後には研修会を行っており、そこでさらに詳しい生徒の情報を共有したり、指導方針を議論したりできた。教職員が一丸となって問題行動の解決に取り組むことができた。	A	生徒の置かれている環境は多種多様であり、どのような体制を組んでも問題行動は発生する。そのことを念頭に置きつつ、問題行動の解決を図る必要がある。個別の指導だけでなく、全体指導の必要性も感じる。また、教職員と保護者の間で連携して指導を実施したい。	

梅光学院中学校・高等学校 部門評価シート 2021年度（分掌）

*達成度は4段階で評価します

学校評価における部門評価							
分掌名	重点目標	具体的方策	達成基準	最終評価	達成度	達成状況の診断・分析	責任者
進路指導部	① 高川生徒の希望進路実現を支援する。	○高川生徒が進路志望を固め、希望進路に進めるように支援する。 ○支援方法は、高川生対象の進路相談、課外授業、個別指導、小論文指導、面接・プレゼン指導等による。 ○FINE SYSTEM、Compass、K-Navi等の効果的な活用を検討し、生徒保護者に適切な情報を提供する。	A 目標の80パーセント以上を実行できている。 B 目標に見合う成果を60パーセント以上を実行できている。 C B以下	○80%以上の生徒が第一志望に合格することができた。 ○進路検討会によって生徒の弱点やサポートの必要性を検討し、適切に指導教員を配置して進めることができた。 ○合格可能性をCompassなどで確認をしながら受験方式や志望大学を決定することができた。	A	進路検討会を定期的に開き、生徒の状況を確認できたこと、Teamsを活用して情報共有ができたことで生徒の第一志望合格率は高い。ただし、国公立や難関私立など、高い目標を掲げる生徒が依然として少ないため幅広い視野をもって高い目標を掲げられるように進路指導を行いたい。現高IIは国公立の受験方式や、受験科目なども早期から意識をさせることで学習の意欲が高まっている。	重村雄太
	② 生徒の進路実現のために進路検討会を定期的を実施し、全教員で生徒を支援する体制づくりをする。	○進路検討会を各学年学期に最低2回実施する（3学期は1回の年間5回） ○進路検討会の結果に基づき、担任はクラスの教科担当に注力すべき生徒やクラスの現状を伝え、成績向上のための指導を実施してもらう。 ○中学から高校までの6年間の進路指導計画を作成、または実施の協力をする。	A 目標の80パーセント以上を実行できている。 B 目標に見合う成果を60パーセント以上を実行できている。 C B以下	○高1、2の進路検討会が1度しか開催することができなかったが、生徒の情報共有は日々の会議の中で行うことが十分にできた。 ○生徒の状況等についてはTeamsやSiemsを活用し情報共有が確実になされた。 ○次年度の進路指導計画を作成することができた。	A	進路検討会を予定通り計画することはできなかったが、月曜や金曜の研修で先生方に情報共有をしながら進めることができたので、入学者選抜対策を順調にすすめることができた。 また、進路指導計画を立て、体系的に進路指導を行うことができた。	
	③ 大学等連携やキャリア教育推進により、生徒の進路意識と学力向上のための環境整備を行う。	○生徒が主体的に進むべき進路について深く考えられるための進路ガイダンス、講演会等を実施し、生徒の進路意識向上を実現する。 ○年間の進路ガイダンス、講演会、研修会、自習室、進路資料室の整備をする。 ○進路関係の環境を整備し、学校全体が勉強をする雰囲気になるよう協力する。 ○夏期課外や個別指導を実施し、学力向上に効果的な指導を行う。	A 目標の80パーセント以上を実行できている。 B 目標に見合う成果を60パーセント以上を実行できている。 C B以下	○進路ガイダンスを定期的を実施することができ、生徒の満足度も大変高い。 ○年間の進路ガイダンスに関しては株式会社日本ドリコム、株式会社ライセンスアカデミーなどと連携をし、適切な時期に適切なガイダンスを実施することができた。 ○夏期課外では生徒保護者の満足度も高く、次年度の実施も決定した。	A	探究の授業や大学等連携卒業研究の指導に多くの時間と全教員の協力を得ることができ、例年にも増して充実したキャリア教育を推進することができている。また、進路ガイダンスにおいても「行ける大学」ではなく「行きたい大学」を発見し、志望校にする生徒が増えてきているので、現時点の成績で生徒の実力をはかるのではなく、育てる意識を教職員がもつようになればさらに進学実績が向上すると考える。	

梅光学院中学校・高等学校 部門評価シート 2021年度（分掌）

*達成度は4段階で評価します

学校評価における部門評価								
分掌名	重点目標	具体的方策	達成基準	最終評価	達成度	達成状況の診断・分析	責任者	
宗 教 部	①	ミッションスクールに導かれたことにより、福音を聞き、神の言葉を聞く機会を得る	○毎日の朝の礼拝に出席する ○特別チャペル(春季・秋季修養会) ○教職員 聖書研究会 ○宗教委員(生徒)の充実 ○保護者へのアプローチ	A 目標の80パーセント以上を実行できている。 B 目標に見合う成果を60パーセント以上を実行できている。 C B以下	コロナ禍においても、学内外のメッセージャーの奉仕、また教職員生徒の協力により、毎日礼拝を行うことが出来た。コロナ対策のため、メインホールに入れない学年や家庭学習となったクラスは、ライブ配信を利用して参加することが出来た。またアーカイブを通して、過去の全ての映像を観ることが出来る。 大学と一緒にゲストを招聘し、春季・秋季特別講演会を実施した。	A	教職員の学びと保護者へのアプローチが、新年度の課題である。	後 藤 献 一
	②	キリスト教やミッションスクールの豊かな文化、行事、伝統を体験する	○入学礼拝、卒業礼拝 ○始業礼拝、終業礼拝 ○イースター ○クリスマス礼拝 ○BCC (月一度の梅光コミュニティチャペル) ○夏と春のバイブルキャンプ	A 目標の80パーセント以上を実行できている。 B 目標に見合う成果を60パーセント以上を実行できている。 C B以下	大学のキリスト教教育部と連携し、様々なキリスト教イベントを提供することが出来た。ゲストスピーカーに動画メッセージを送ってもらうことにより近隣に限らず、遠方の先生のメッセージも、海外からも送っていただいた。クリスマスキャストには58名が応募し、クリスマス礼拝および聖劇で活躍した。 コロナ禍のため、夏と春のバイブルキャンプはどちらも泊りがけではなく、クロスライトに通いのリトリート	A	大切な式典は、保護者にはライブ配信及びアーカイブで後日配信した。日々の礼拝も配信は可能であり、好きな時間帯、安全な場所で、享受することが出来る。	
	③	キリスト教精神・隣人愛を実践する	○サマリア募金を通して、貧困にある子どもたちを支援する ○施設を訪問し、愛を表す ○ボランティア活動をする	A 目標の80パーセント以上を実行できている。 B 目標に見合う成果を60パーセント以上を実行できている。 C B以下	中高で4人のチャイルドスポンサーを継続している。昨年度から始まったサマリアアカジュアルデーにより、200円募金をすれば、その日は私服登校が可能となっており、楽しみながら貢献することが出来る。 コロナ禍のため、合唱部やハンドベル部が施設訪問が出来ないが、校内の礼拝において、奉仕をした。	A	ボランティア活動は、校内外の清掃活動になっているが、新しく開拓していく必要がある。	

梅光学院中学校・高等学校 部門評価シート 2021年度（分掌）

*達成度は4段階で評価します

学校評価における部門評価							
分掌名	重点目標	具体的方策	達成基準	最終評価	達成度	達成状況の診断・分析	責任者
ICT教育推進部	① 生徒に「主体性」「協働性」「創造性」を身につけさせる。	○生徒が主体的にICTを活用して学校行事をよりよいものにしていくサポートをする（連絡手段等）。 ○生徒が協働してICTを活用し、学校に付加価値を与えるものを作るためのサポートを行う。（ICT委員会の運営等）	A 目標の80パーセント以上を実行できている。 B 目標に見合う成果を60パーセント以上を実行できている。 C B以下	○学園祭や研修旅行など、様々な行事でiPadを活用できた。 ○ICT委員が率先してiPadを使用する上でルール作りを行っている。本館3階廊下の掲示板など、生徒が主体となってICT機器の活用が行われている。	A	○論文発表や英語のコンテストなどプレゼンテーションの機会が増加し、スライド作成なども含め、明らかに生徒のプレゼン能力の向上が見られた。引き続き様々な学校行事で、情報の伝達手段の一つとしてiPadを活用し、生徒の主体的な活動を促していく。 ○共有スペースでの連絡電子掲示板の活用や、iPadのルール制作、新入生iPad導入のサポートなど、ICT委員が中心となり徐々に生徒の主体的な活動が行われるようになってきた。来年度も委員会を中心に、全校生徒から様々な活動を募り、中高全体の活動を盛り上げていく。	森田 裕介
	② ICTを用いた授業の導入・定着と授業外でのICT活用の促進	○教員の授業へのICT導入サポート、研修の実施と次年度に向けたICT研修の考案 ○学校行事、部活動での活用イベントの企画	A 目標の80パーセント以上を実行できている。 B 目標に見合う成果を60パーセント以上を実行できている。 C B以下	○非常勤の先生を含むすべての教員が授業でiPadを活用できるようになり、即時双方向型の遠隔授業もスムーズに行えるようになった。	A	○ICT教育推進部が中心となり、新入生・保護者・新着任の先生へのiPad導入サポートを行った。全国的なiPad需要の高まりから納期が遅れたが、過去の経験からスムーズな導入ができた。 ○他の分掌と連携し、生徒の成績や出欠状況、希望進路、進路指導進捗状況、学校生活の様子など、生徒個人の様々なデータをSiemsで一括管理し、教員間で情報共有が可能となった。全教員が一人の生徒を様々な視点からサポートが可能となるため教育的な効果は非常に大きかった。来年度はBLENDを導入することにより、情報の共有と管理をさらに向上させ、生徒への細かな指導に結び付けていきたい。	
	③ 校内ICT環境の維持・整備	○教室内のICT機器、教職員の使用する機器の管理、メンテナンス ○生徒、保護者の質問対応と、ICTに関するトラブル対応と担当業務の確実な遂行	A 目標の80パーセント以上を実行できている。 B 目標に見合う成果を60パーセント以上を実行できている。 C B以下	○授業や行事を円滑に進めるだけのICT機器は整備されている。一方で教員への貸し出し機器の管理が甘く、紛失が多い。 ○保護者から多きなクレームはなかった。	A	校内のICT機器や、教職員・生徒への貸出機器の管理方法も整備され、ICT環境は十分に整ったと言えるが、突発的な故障や問題に対して早急に解決できる教員がいないなど問題がある。来年度はICT補助員を設け、教職員や生徒のサポートを充実させていきたい。	

梅光学院中学校・高等学校 部門評価シート 2021年度（教科）

学校評価における部門評価							
教科	重点目標	具体的方策	達成基準	最終評価	達成度	達成状況の診断・分析	責任者
国語	① 読解力の育成	<p>○授業者による説明や発問を通じて、筆者の主張や小説の主題を読み解く能力を育てる。</p> <p>○ロイロノートやプリントを活用して問題演習を行う。</p> <p>○授業者や級友の作成した解答を読み、解答作成能力を養う。</p>	<p>A…70%以上の生徒が「80点」以上の解答を作成することができる。</p> <p>B…50%以上の生徒が「70点」以上の解答を作成することができる。</p> <p>C…30%以上の生徒が「50点」以上の解答を作成することができる。</p>	<p>○作中の言葉に着目しながら読解を行うことで、各学年作品の主題を読み取ることができた。</p> <p>○これまで以上にICT機器を活用し、さまざまな資料を用いながら解説を行い考えを深めることができた。</p> <p>○各作品ごとワークシートの解答を確認しながら、語彙力を高め適切な解答作成が出来るようになった。</p>	B	<p>○各学年現代文・古典関係なく作品の主題を読み取ることができた。</p> <p>また今年度よりデジタル国語便覧の導入などICT機器をさらに活用した授業を行い、生徒が対面・オンライン関係なく教材に触れることができた。</p> <p>一方作品を通じて得た自分の考えを論述形式で表現はできたものの、プレゼンテーションやディスカッションを通じ自身の考えを共有する時間が少なかったことが今後の課題としてあげられる。</p>	川口 駿純
	② 言語事項の習得	<p>○文法事項や古文単語、漢文の用字や句法、あるいは現代文で重要な語句、さらには漢字の知識を育成する。</p>	<p>A…80%以上の生徒が一通りの言語事項を習得している。</p> <p>B…60%以上の生徒がそれなりの言語事項を習得している。</p> <p>C…50%以上の生徒が最低限の言語事項を習得している。</p>	<p>○口語・文語文法や漢文句法を作品を読みながら学習することができた。</p> <p>○漢字は毎週テストを行うことにより、語彙力を身に付けることができた。</p> <p>○現代文では接続詞に気を付けながら、作品を読むことで作者の主張や主題を読み取ることができた。</p>	A	<p>○語彙力を身につけるために定期的に小テストを行うことができた。また接続詞に着目し現代文の読解へとつなげることができた。</p> <p>古文単語や漢文句法に関しては作品を通じ学ぶことにより、作品読解と併せて知識を定着することができた。</p> <p>また多くの作品から古人の考えを学び、現代と何が通じているのかを自分の言葉で述べる機会を作ることができた。</p>	

梅光学院中学校・高等学校 部門評価シート 2021年度（教科）

学校評価における部門評価							
教科	重点目標	具体的方策	達成基準	最終評価	達成度	達成状況の診断・分析	責任者
社会	① 基礎学力を育み、学習意欲を高める	<ul style="list-style-type: none"> ○小テストなどを実施して生徒の理解度を把握しながら、理解度を高めるように授業を工夫する。 ○適切な量のホームワークを課し、家庭学習の姿勢を育む。 ○多彩な資料を準備しICTをフル活用して、教科への興味関心を呼び起こす 	<ul style="list-style-type: none"> A…80%以上の生徒が目標を達成できている B…60%以上の生徒が目標を達成できている C…50%以上の生徒が目標を達成できている 	<ul style="list-style-type: none"> ○単元別テストやアプリを用いた小テストを頻繁に実施することによって、生徒の理解度を把握することに努めた。 ○中学ではワークを中心として、学習習慣の定着を図った。高校は自主的取り組みを促した。 ○生徒・教員のICT活用が定着し、生徒がタブレットを使用して作品をつくる機会を多く設けることができた。 	A	<ul style="list-style-type: none"> ○単元別テストを通して生徒の理解を把握する機会を設けた。しかし全体的な基礎学力の向上という点で課題が残る。 ○ホームワークだけでなく、自己の課題を見つけ、日々学習に取り組む姿勢を多くみることができた。 ○生徒が教科書で学んだ知識を基に、自主的に社会課題に関心を持って、タブレットを活用して学びを深めた。 	広木光
	② 大学入試に適應できる確かな学力を養成する	<ul style="list-style-type: none"> ○入試を意識させるため、模試や大学入試過去問などにチャレンジさせる。 ○入試を見据え、知識を活用する手法を身に付ける。 ○大学入試に對應するために、必要に応じて課外を実施する。 	<ul style="list-style-type: none"> A…80%以上の生徒が目標を達成できている B…60%以上の生徒が目標を達成できている C…50%以上の生徒が目標を達成できている 	<ul style="list-style-type: none"> ○高IIは進度計画に沿った授業を行い、高IIIは入試を見据えて適宜演習問題に取り組んだ。 ○単元別テストを通して、知識を活用した資料の読み取り・作成に取り組んだ。 ○授業内容の理解を深め、大学入試に對應するために、必要に応じて課外を実施した。 	B	<ul style="list-style-type: none"> ○演習問題に取り組む機会を多く設けることができたが、入試科目として利用する生徒が少なかった。 ○単元別テスト等で見つけた知識・技能を、模試等で発揮することができた。 ○生徒の要望や学習状況に応じて課外を実施し、学力養成に努めた。 	

梅光学院中学校・高等学校 部門評価シート 2021年度（教科）

学校評価における部門評価								
教科		重点目標	具体的方策	達成基準	最終評価	達成度	達成状況の診断・分析	責任者
数 学	①	分かる授業の展開	<ul style="list-style-type: none"> ○ 小テストなどを実施して生徒の理解度を把握しながら、理解度を高めるように授業を工夫する。 ○ 教科への興味関心を呼び起こすため、タブレットなどICT機器を活用を工夫する。 ○ 生徒の主体的・対話的な深い学びの実現のため授業を工夫する。 	A…80%以上の生徒が授業を肯定的に評価している。 B…60%以上の生徒が授業を肯定的に評価している。 C…50%以上の生徒が授業を肯定的に評価している。	<ul style="list-style-type: none"> ○単元別テストを細かく設定して、取り組みやすいように工夫した。 ○タブレットを使い、授業中の説明だけでなく、質問・提出物確認のため、積極的に活用した。また、解説動画を作成させて、より単元を理解させることができた。 ○生徒間で話し合いをさせたり、生徒の解答をお互い見ることができるようにして、解答方法やノートの記入の仕方など確認し合った。 	A	<ul style="list-style-type: none"> ○単元別テストに向けて、通常の授業から意識的に細かく指導していた。 ○常勤教諭、非常勤教諭関係なく、タブレットを効果的に活用した。出勤しない日もあるため、タブレットを通じて、前もって課題を配信したり、後日、フォローした。 ○生徒同士で、解答を確認させた授業も行った。お互いの意見や考えを共有し、BESTな解法を身に付けるようにした。 	林
	②	基礎力・応用力の育成	<ul style="list-style-type: none"> ○ 日々演習にきちんと取り組むよう指導し、高い提出率の維持に努める。 ○ 単元別テスト後の再チャレンジを徹底することで、基礎学力の向上を図る。 ○ 過去問などの演習を行って、入試に対応できる応用力を身に付けさせる。 	A…80%以上の生徒が目標を達成できている B…60%以上の生徒が目標を達成できている C…50%以上の生徒が目標を達成できている	<ul style="list-style-type: none"> ○未提出者への声掛け、提出者の内容の確認などまめに行なった。 ○再チャレンジに向けて、質問の時間を留意し、より確実に理解できるようにした。高3の受験者の指導には時間を割いた。 ○演習の時間は、過去問等が載っているテキストを使用し、指導・解説した。 	A	<ul style="list-style-type: none"> ○未提出者には、週担当・個人担当の教員を通じて声掛けをした。また、提出者の内容確認も徹底した。 ○放課後の時間が確保できず、成績会社への指導はもう少し工夫が必要だった。 ○過去問を活用した指導は、高3生を対象に、次年度も続けていきたい。模試の事前対策授業を行った結果、成績向上が見られた。 	武

梅光学院中学校・高等学校 部門評価シート 2021年度（教科）

学校評価における部門評価								
教科		重点目標	具体的方策	達成基準	最終評価	達成度	達成状況の診断・分析	責任者
理科	①	自然の物事・現象を論理的に説明できるようになる	<ul style="list-style-type: none"> 基礎学力の向上と、主体的な学びができるようになるために、予習と復習を習慣付けられる課題をあらかじめ配布し、それをもとに毎授業時間に5分間テストを行う。 教科書に紹介されている先人の実験手法やその結果をもとに、自然の事象や現象を解き明かしていき過程を学び、生徒自らが説明できるようになるよう授業を工夫する。 	<ul style="list-style-type: none"> A…80%以上の生徒が目標を達成できている B…60%以上の生徒が目標を達成できている C…50%以上の生徒が目標を達成できている 	<ul style="list-style-type: none"> 5分間テストで多くの問題を解くことによって基礎学力の向上がみられ、ほとんどの生徒は回を重ねるごとに良い点を取ることができるようになった。 全ての学年でスライドや動画を用いて、先人たちの研究を体験できるような授業を行った。その結果、生徒は事象、現象を論理的に説明するにはどうすればいいか考えることができるようになった。 	B	<ul style="list-style-type: none"> 中・高の多くの生徒は、理科に関して継続的な学習態度が身につけていない。しかしながら毎回の授業にほんの少しのミニテストを加えることで日々少しずつ主体的に勉強に取り組む姿が見えるようになった。 ほとんどの生徒が先人たちの実験の結果を論理的に解釈し、理解することができるようになった。理科の実験に興味を持ち、自分で新しい実験をしてみたいと思うようになった。 	水野
	②	自然の事象・現象を科学的に探究するための資質・能力を身につける	<ul style="list-style-type: none"> 生徒に「探究の方法」を習得させるために、自然の現象から疑問を見出し、仮説を立てて検証する「探究」のプロセスを授業へ積極的に盛り込む。 自然の事象・現象に対する概念や原理・法則の理解を図るために、観察や実験を行い、得られた結果を比較したり、関連付けたりできるよう、授業をデザインする。 	<ul style="list-style-type: none"> A…80%以上の生徒が目標を達成できている☑ B…60%以上の生徒が目標を達成できている☑ C…50%以上の生徒が目標を達成できている 	<ul style="list-style-type: none"> 主に高校1年2年の生徒が身近な事象に疑問点を見出し、仮説を立て、実験を行う姿勢を身につけることができ、「探究活動」ができるようになった。 高校1年2年のほとんどの生徒が観察や実験を通して得られた結果を図や表にまとめ、前の実験のデータと見比べたり他のグループと意見を交換できるようになった。 	B	<ul style="list-style-type: none"> 新型コロナウイルス感染症が蔓延する中、理科実験を実施することが困難になり、予定していた実験数を行うことができなかった。 そのような環境下でも、実験一成果発表のプロセスを繰り返すことによって、実験で着目すべき点、得られた結果の解釈について生徒自身で考えることができるようになった。また、班員と協力し、一人では解決できない問題を乗り越えることができた。 	雅晴

梅光学院中学校・高等学校 部門評価シート 2021年度（教科）

学校評価における部門評価								
教科		重点目標	具体的方策	達成基準	最終評価	達成度	達成状況の診断・分析	責任者
保健 体育	①	積極的に運動に親しむ資質や能力の育成	<ul style="list-style-type: none"> ○個人の授業記録により、自身の成長や能力を客観視させる ○iPad等のICT機器を活用した協動的な学習 ○シラバスの整理（男女別授業、使用施設等の再検討） 	<p>A 80%以上の生徒が目標を達成できている。</p> <p>B 60%以上の生徒が目標を達成できている。</p> <p>C 50%以上の生徒が目標を達成できているとは言えない。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○各種目で授業の記録やipadでの撮影を行い自分自身の課題や良かった点を把握することができた。 ○遠隔授業等でもダンス動画の撮影、発表会などを行うなど対話的で主体的な学びができた。 ○男女の人数に差があり分けることが難しい。中高で連携を取り競技力の向上に繋がるような仕組みづくりを行った。 	A	<p>体育館のwifi環境が整い、ipadを活用したグループワークなどの主体的・協動的な活動が活性化した。見本となる正確な動作や自身の動きなども確認することができ、技術の向上にも繋がっている。また、中高一貫校の特色を生かし、競技力、体力面の向上を図ることができた。</p>	森田
	②	生徒の安全を重視した授業の確立	<ul style="list-style-type: none"> ○熱中症対策（水分補給、帽子の着用等） ○担任、保健室、保護者との連携 ○常設用具の安全管理（ゴール、防球ネット等） 	<p>A 80%以上の生徒が目標を達成できている。</p> <p>B 60%以上の生徒が目標を達成できている。</p> <p>C 50%以上の生徒が目標を達成できているとは言えない。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○熱中症指数を測定器で計測し、一定以上を超えると授業中止や水分補給のタイミングなどの判断を的確に行うことができた。 ○ケガや事故が起きた場合すぐに保健室と連携を取り対応することができた。 ○使用する前に使用用具の安全管理を教員が行い常に安全管理に努めた。 	A	<p>熱中症の事故を未然に防ぐために保健室と連携を取りながら授業を行うことができた。また、使用用具の安全管理を行い老朽化しているものに関してはすぐに買い替え対応した。大型マットや跳び箱など。</p>	裕介

梅光学院中学校・高等学校 部門評価シート 2021年度（教科）

学校評価における部門評価							
教科	重点目標	具体的方策	達成基準	最終評価	達成度	達成状況の診断・分析	責任者
音楽	① 主体的な音楽活動を通し、音楽を愛好する心情を育てる。	○基本的な音楽知識の習得。 ○主体的に歌唱・器楽をしようとする態度の育成。 ○鑑賞・ワークシートの活用	A 80%以上の生徒が目標を達成できている。 B 60%以上の生徒が目標を達成できている。 C 50%以上の生徒が目標を達成できている。	○単元別テストの実施により全ての生徒の点数が上がった。○コロナ禍で年度当初はリモートで歌唱、ロイノート等ICTの活用により録ってもらった実技を個別に指導出来ることで、より生徒一人一人と繋がることができ細かい指導が出来た。○制限化の中でも音楽祭、合唱祭を実施することができた。短い準備期間の中、お昼休み、放課後の少しの時間を重ねて、委員会を中心とした生徒と連携して、コロナ対策に気をつけながら合唱指導、練習を進めることができた。○今年度の梅光ヴィジョンでもある我が校ならではのハンドベルを用いて、音楽活動、特に歌唱指導が制限される中、3学期の授業は合唱やリコーダーにかわる新しいアンサンブル、取り組みが出来た。○オペラをシリーズで鑑賞するなど、教科書で取り扱われる単元としてのそれだけでなく、より幅広く深い内容に取り組むことができた。	A	○単元別テストの実施により全ての生徒の点数が前年度より上がったことで年度初めに、音楽は好きだが学校の音楽は嫌いだと言っていた生徒達が、意欲的に鑑賞や実技、毎回の学習態度の変化が見られ、クラシックや教科書の音楽作品にも興味を示し、生徒から興味を持ってたくさん質問を受けるようになった。○音楽祭の合唱活動を通して、教科のみならず、クラスとしての学びがあったことも大きい。授業ではコロナ禍でも、声楽を中心とした歌唱指導、梅光ヴィジョンの「ハンドベルに全員が演奏に触れる事」、また鑑賞指導の充実を図ることができた。	大森 道子
	② 主体的な音楽活動を通し音楽活動で豊かな感性を育む。さらに専門性を高め、将来の音楽活動の礎を作り上げる。	○基本的な音楽知識の習得。 ○演奏活動を中心とした授業。 ○入試問題への取り組み。	A 80%以上の生徒が目標を達成できている。 B 60%以上の生徒が目標を達成できている。 C 50%以上の生徒が目標を達成できている。	○音楽科においては、テストそのもの見直し、評価の統一、授業での実技レッスンの方法やアンサンブルではそれぞれの楽器を生かし演奏会のためだけでなく日頃からの力をつけていくことなど、様々な課題が挙げられた。作曲など単年の学びから、2年続けて履修出来ることでより深い学び、またそれらを楽譜作成アプリ、ICTを用いてさらに習熟させていくことが出来た。○科目ごとの授業内容を明確にしつつ、その繋がりを教授しながら、学びとしての、知識としての音楽が実技に結びついてきた生徒が増えた。○演奏会などの取り組みを通して、より主体的に目標をもって練習することや、仲間やクラスで共に音楽を高めていこうとする姿勢が育まれた。	A	合唱祭、音楽科の演奏会では、新しくスライドを使った曲紹介、それまでの音楽科中心とした行事から、学校行事としてより生徒一人一人が目標をもって取り組めたことが大きかった。聴衆である生徒たちの、自主的な鑑賞活動に繋がったこともよかった。○高3生においては、高い目標設定を持ち入試問題や課題に取り組めた。○音楽科全体においても、単元テストによりさらに深く内容を進められ、生徒全員が前年度より良い点数を取りことが出来、テスト毎に学習意欲の向上、変化を感じた。	

梅光学院中学校・高等学校 部門評価シート 2021年度（教科）

学校評価における部門評価								
教科		重点目標	具体的方策	達成基準	最終評価	達成度	達成状況の診断・分析	責任者
美術	①	○美術の創造活動の喜びを味わう。（中学）	○各学年の作品制作を通じて、丁寧さと根気強さと完成する喜びを体験する。	各学年の作品が期限内に完成した作品が、 A：9割以上の提出 B：7割以上の提出 C：7割未満の提出となる。	各学年ともに、熱心に作品制作に取り組んだ。欠席の多い生徒や転校生の作品については、各個人担当と連絡を取り合って取り組ませようとした。	B	各学年ともに、熱心に作品製作に取り組んだ。不登校気味の生徒、配慮が必要な転校生の作品製作については、工夫が必要であると感じた。	林 武
	②	○ICTを活用した美術活動を体験する。（中学校）	○タブレットを活用して、作品提出させたり、お互いの作品を鑑賞する。 ○美的感覚や価値観を日常生活の中で、主体的に表現できる。	アンケート等を通して、将来にわたり美術を愛好する心情を育てることが A：目標以上の成果を上げた。 B：目標に見合う成果を上げた。 C：目標に見合う成果に及ばなかった。	オンライン授業では、タブレットを活用して、課題に取り組ませた。製作時間の多い学期に向けて、進捗状況と照らし合わせ、教材の選定をし直した。	A	作品に対して、他の生徒と関わり合いながら作業を進めていくのではなく、自分と見つめ合いながら仕上げる体験ができた。また、授業時間の不足される学年については、次年度に引き続き作業できるように準備している。	

梅光学院中学校・高等学校 部門評価シート 2021年度（教科）

学校評価における部門評価								
教科		重点目標	具体的方策	達成基準	最終評価	達成度	達成状況の診断・分析	責任者
英語	①	4 技能型英語教育プログラムの遂行（高校3年生を除く高3の場合はこの代わりに模擬試験における成績の向上）	○カリキュラムに従った授業を行う。 具体的には以下のことを行う。 ・多読 (Xreading) ・語彙 (Memrise/Quizlet) ・ Key sentences/Personal sentences ・生徒の発話を記録させて評価する ○高3の場合は模擬試験における英語の成績の向上を目指した学習指導を行う	○4 技能全てに関して成長を促せた概ね達成できた 80%～ A 一部達成できないところもあった B 達成できているとは言えない C	4 技能を大切にしたソフトパスに従い、授業が実施され、今年度はライティング指導において構造・型に焦点をあて指導を行ったり、プレゼンテーション実施回数の増加により、特に産出能力において成長が見られた。それは英検の成績にも現れており、ライティングのスコアの向上につながった。また、朗唱・弁論大会においても市内1位、県内1位と素晴らしい成績を収めた生徒も輩出した。また、教員間での授業見学を実施し、授業力向上に努めた。 高IIIにおいては、模試の前に対策講座を行ったことで、意識の向上や問題の分析、モチベーションの向上を促進した。	A	4 技能を大切にし、英語を使って学ぶ授業を展開してきた。コロナ禍においてもネイティブの常勤講師が2人在籍しており、全生徒にアウトプットを行う機会を十分に与えることができていく。多読指導においては、複数の方法での対策をおこなったが、今後も模索を続ける必要がある。年度当初に、授業時間を使った指導も行うことも検討している。 今後もコロナウイルスの感染により、留学を行うことができない可能性も高いため、オンラインでの留学プログラムや校外異文化交流プログラムなども活用し、生徒の英語学習の促進を行っていく。	フリック・ウッドール
	②	ICTを用いた英語教育の推進	○Quizletなど英語科共通で使っているICTソフト、プログラムを使う ○英語科共通で用いていない独自のICTソフト、プログラムを発見または開発して授業に用いて、実績を上げる（語彙学習などに具体的な成果をあげる）	○使用率 ○具体的な成果 ○既存のソフト・プログラム使用率 100%=A 90～100%未満=B それ以下C ○新しいソフト・プログラム使用の実績 あり=A なし=B ありで実績あり=S	昨年までに引き続いて、Memrise、Quizlet、Socrativeを活用し生徒の英語学習を促進した。常に新しいソフト、プログラムの研究を行い、英語科教員間で共有・実践を行った。	A	今年度も新たなアプリ、ソフトを授業内で取り入れることができたが、今後は使用アプリ、ソフトの増加に伴う取捨選択が必要になることが予想される。既存のテクノロジーに満足することなく、生徒により良い支援を行えるように分析・検討していく必要がある。また、コロナ禍での異文化交流として、今後ともオンラインでの留学プログラムを活用していく。	

梅光学院中学校・高等学校 部門評価シート 2021年度（教科）

学校評価における部門評価							
教科	重点目標	具体的方策	達成基準	最終評価	達成度	達成状況の診断・分析	責任者
技術・家庭	① 実践的な授業の充実	<ul style="list-style-type: none"> ○基礎的知識・技術の定着 ○ICT機器を活用した教材の工夫 ○実習を通じて危機管理能力やコミュニケーション能力を身につけさせる 	<ul style="list-style-type: none"> A 80%以上の生徒が目標を達成できている。 B 60%以上の生徒が目標を達成できている。 C 50%以上の生徒が目標を達成できているとは言えない。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ICT機器や、アプリを活用し、家庭科の基礎知識を身に付けることができた。 ○ペーパーレスを意識し、さらなるICTの活用を模索した。 ○オンライン授業では、家庭の様子を題材とした授業を企画した。 	A	<p>遠隔授業の期間に食事作りという家庭での役割を与えることで、自らが家庭の一員だという意識を持ち、家族とのコミュニケーションにもつなげることができた。</p>	林武
	② SDGsなどを意識し、環境に配慮した家庭教育の実践	<ul style="list-style-type: none"> ○家庭菜園できるように、木材を活用したプランターづくりをする。 ○破れてもすぐ新しものを購入するのではなく、自らの手で、修繕できる裁縫の技術を身に付ける。 	<ul style="list-style-type: none"> A 80%以上の生徒が目標を達成できている。 B 60%以上の生徒が目標を達成できている。 C 50%以上の生徒が目標を達成できているとは言えない。 	<ul style="list-style-type: none"> ○実際に、プランターをつくり家庭菜園できるように取り組んだ。 ○感染症対策のため、今年度も実施できなかったため、調理実習については不十分である。 	B	<p>夏休みには、絵本作成を課題にした（高等学校）。コロナ禍のため、調理実習を十分に実施できなかった。来年度は、例年行っているおさかな料理教室を実施し、下関という海産物の豊富な地域に生まれた特性を生かすために、さらなる技術向上に努めたい。</p>	

梅光学院中学校・高等学校 部門評価シート 2021年度（教科）

学校評価における部門評価							
教科	重点目標	具体的方策	達成基準	最終評価	達成度	達成状況の診断・分析	責任者
情報	① 情報モラル教育の充実	○ニュースなど身近な話題で情報モラルに関係したものがあれば、随時生徒に提供していく。 ○生徒同士の話し合いを通して、情報モラルについての理解を深めさせる。	A 80%以上の生徒が目標を達成できている。 B 60%以上の生徒が目標を達成できている。 C 50%以上の生徒が目標を達成できているとは言えない。	ネットいじめや、インターネット詐欺など身近な話題には多く触れることができたが、遠隔授業時に実施をしたこともあり、生徒同士の話し合いや活発な意見の交換までには至らなかった。	B	タイムリーな情報モラルの話題に触れながら、グループワークを通して身近な問題の解決策を考えた。遠隔授業の時間では十分なグループワークや発表が出来なかったため、今後の課題である。	森田 裕介
	② パソコン操作のリテラシーを身につける	○OfficeやMac Book、iPadを活用し、基本的なパソコン操作の知識を身につける。	A 80%以上の生徒が目標を達成できている。 B 60%以上の生徒が目標を達成できている。 C 50%以上の生徒が目標を達成できているとは言えない。	officeだけでなく、プログラミング授業の一環で、新しくHP制作の授業を取り入れた。スマホしか扱えないデジタルネイティブから十分な脱却ができた。	A	来年度必須となるプログラミングの授業を実験的に実施した。officeの実習だけではなく、swiftやHP作成などを通して、問題を発見し自ら解決していく力を養うことが出来た。	

梅光学院中学校・高等学校 部門評価シート 2021年度（教科）

学校評価における部門評価								
教科		重点目標	具体的方策	達成基準	最終評価	達成度	達成状況の診断・分析	責任者
宗教	①	福音を聞くこと、知ること、信じること。神と自分と他者と、神の造られた被造物(自然や動物)を愛し仕える生き方(キリスト教精神、普遍的価値である人権や平等や博愛)を身に着けること。	歴史にわたって人々を励ましてきた旧約聖書・新約聖書テキストから、キリスト教の英知を学ぶ。現代の諸問題を取り扱い、いかに考え、いかに生きるか、アクティブラーニングを通して、生徒同士が学び合う。	A 80%以上の生徒が目標を達成できている。 B 60%以上の生徒が目標を達成できている。 C 50%以上の生徒が目標を達成できている。	5人の教員が、宗教の時間を担当したので全学年を5クラスに分けた。今年はおもに「戦争と暴力」について様々な視点から学んだ。世界の争いから、他者との関係、自分に対する暴力まで、事例、科学、聖書の視点から考察した。毎学期、学年の組み合わせを変えて、グループワークに取り組み、全員が関り、発表し、互いに学び合った。	A	毎学期2回ほどの発表があるため、プレゼン能力が著しく向上している。ただ聴くだけの授業ではないため、主体的な参加が求められる。下級生が上級生と組むことによって、互いに教え合ったり、プレゼンの発表は自分たちで評価し合ったものが成績にも反映される。	後藤 献一
	②	聖書、キリスト教文化を理解し経験すること。	学内外のキリスト教行事、地元の教会の礼拝に出席し、信仰生活を中高生のうちに体験する。そのフィールドレポートを提出する。継続して参加するよう勧める。礼拝において主体的に参加し、奉仕をする。ボランティア活動を経験する。	A 80%以上の生徒が目標を達成できている。 B 60%以上の生徒が目標を達成できている。 C 50%以上の生徒が目標を達成できている。	コロナ禍が続き、山口県にまん延防止等重点措置が適応されたため、地元の教会に行くことを必須課題にはしなかったが、梅光学院大学と連携し、コロナ対策を取りながら、様々なキリスト教関連行事が行われ参加する機会があった。夏と春にはスプリングバイブルリトリートも開催された。毎朝の礼拝も生徒が司会をしたり、時にはメッセージをしたりして主体的に関わった。	B	自由参加や自由課題にすると、取り組む生徒と取り組まない生徒に差が現れた。どのように動機づけるかが課題である。	

梅光学院中学校・高等学校 部門評価シート 2021年度（学年）

学校評価における部門評価							
学年	重点目標	具体的方策	達成基準	最終評価	達成度	達成状況の診断・分析	責任者
中学校	① 生活と学習の場としてのコミュニティを作る（支え合う学級、学年、中学となる）	<ul style="list-style-type: none"> ○生徒会（委員会）活動を通して生徒主体の学校を作る。 ○「全員担任制」によって学校全体で生徒一人ひとりをケアする。欠席者への対応は、事務室とも連携する。 ○「全員担任制」によって一人ひとりの生徒の情報を全校で把握する。 	<ul style="list-style-type: none"> A 支え合う学級、学年、中学校が達成している B 概ね達成しているが一部達成できていない C 多くの場面で達成できていない 	21年度で全員担任制2年目になり、生徒一人ひとりを教員と職員全体でケアする体制が効率よくできるようになった。また、委員会活動が盛んとなり、生徒が自主的に学校活動に関わるようになった。しかし一方で、SNSのトラブルなども見られ、支えあう学級が十分気築けなかったため、達成度はBとした。	B	放課後の教員間の連絡、共有をまめにし、生徒の自主的な活動をさらに助長し、互いに支え合うことを明確に目標として意識させることが必要である。	只木 徹
	② 学習習慣の確立	<ul style="list-style-type: none"> ○単元別テストによって日頃から学習する習慣をつける。また、カレンダー機能を活用して、勉強のスケジュールを把握しやすくする。 ○全員担任制により個々人のニーズを把握し学習意欲につなげる。 ○留学など学校のプログラムを通して学習意欲を引き出す。 	<ul style="list-style-type: none"> A 大多数の生徒がこの目標を達成している B 概ね達成しているがまだ達成できていない生徒が一部に存在する C 多くの生徒が達成できていない 	単元別テストは2年目を迎え、再チャレンジテストの活用により、全教科で浸透し、成績が向上した。留学については、コロナ禍のため、実施できていないのが残念である。	A	昨年の反省をふまえ、単元別テスト、再チャレンジテストの日程をタブレットのカレンダー機能に反映させて調整した。しかし、生徒の中には、十分に消化しきれていない状況も見られたので、来年度は、さらに細かく生徒の様子を把握していく必要がある。	

梅光学院中学校・高等学校 部門評価シート 2021年度（学年）

学校評価における部門評価							
学年	重点目標	具体的方策	達成基準	最終評価	達成度	達成状況の診断・分析	責任者
高等学校	① 学習習慣の確立	<ul style="list-style-type: none"> ○単元別テストによって日頃から学習する習慣をつける ○全員担任制により個々人のニーズを把握し学習意欲につなげる ○留学など学校のプログラムを通して学習意欲を引き出す 	<ul style="list-style-type: none"> A 大多数の生徒がこの目標を達成している B 概ね達成しているがまだ達成できていない生徒が一部に存在する C 多くの生徒が達成できていない 	<p>単元別テスト導入の結果、ほぼ全教科で平均点が上がり、評定平均も全体的に向上した。多くの生徒にとって学校での勉強は「主体的に努力すればそれだけ成果がでる」ものとなり、前向きに取り組む姿勢が育まれたと考えられる。</p>	B	<p>模擬試験の結果が全学年で向上していることから学習習慣が身についた生徒は少なからず増加したとが考えられる。</p> <p>ただ、教職員も模試の対策や振り返りを熱心に行っていることも成果の要因と考えることもできるので、学習習慣が確立したという数値的根拠は見いだせないところもある。</p>	重村雄太
	② 自己の進路について考え、進路目標に基づいて学校生活を設計する	<ul style="list-style-type: none"> ○進路を考えるプログラムを行う ○模擬試験の利用とその振り返りの機会を設ける ○高大連携プログラムを進路指導に結びつける 	<ul style="list-style-type: none"> A 大多数の生徒がこの目標を達成している B 概ね達成しているがまだ達成していない生徒が一部に存在している C 多くの生徒が達成できていない 	<p>大学等連携卒業研究プログラムに本格的に取り組むことができ、生徒が各々自身の進路について深く考えることができたため、早期に自身の進路を確定させることができた。また、進路ガイダンス等も例年より数多く、かつ質も高めることができたことで、志望進路を多くの高1・IIの生徒が定めることができた。</p>	A	<p>大学等連携プログラムを生徒主体で進めてきたことで、生徒の進路実現へ意欲が昨年に比べて大きく高まった。また、模擬試験や学校行事の振り返り活動などにも力を入れたことで、自己発見の場を多く設けることができた。そのため、希望進路を語るができる生徒が増えたため、さらに質を高めたガイダンス等を行いながら進路指導を進めていく必要がある。</p>	
	③ 生徒が学校を自らのコミュニティと自覚し生徒主体の学校作りを行う	<ul style="list-style-type: none"> ○生徒会活動の活発化 ○委員会活動の活発化 	<ul style="list-style-type: none"> A 大多数の生徒がこの目標を達成している B 概ね達成しているがまだ達成していない生徒が一部に存在している C 多くの生徒が達成できていない 	<p>生徒会がこの10年で最も活動的となった。校則のあり方を今の時代に合ったものとなるよう独自の提案をし、試行して、さらにアンケートをして生徒や保護者、教職員の意見も取り入れて良いものにしてしようとしている。形骸化していた委員会組織を活性化させ、全校の生徒を学校運営に巻き込み、自主的な活動が激増した。</p>	A	<p>行事や規則の改革から始まった。生徒の自主的な学校運営参画は、授業のあり方や、評価のあり方まで進むことが望まれる。生徒会の執行部は毎年変わるため、こうした体制の維持、継続が大きな課題である。</p>	